

◆障害学生の修学支援・II◆

第二回 二つの難題

筑波技術大学教授 石田久之

前号でいきなり、「高邁な理想」などと書いてしまったので、ちょっと引いている方もいるかもしれませんが、今回は具体的な話です。

いろいろな大学やセミナーなどでお話を伺いますが、修学支援について、抱えている課題はそれぞれです。「今度初めて入ってくるので対応が全く分かりません」、「四年生になるのですが、就職活動のサポートはしたことがないので」等々、取組内容や支援の進み具合で、様々な問題がでていきます。ですが、ここで敢えて、それらの中でも多くの大学でよく聞く課題を挙げるとすると、二つあります。一つは、聴覚障害学生へのノートテイク。もう一つは、軽度の発達障害学生への対応です。これらについて、詳しく考えてみましょう。

ノートテイク

聴覚障害学生の学習保障には、ビデオへの字幕挿入、F

一方、一人の支援学生が週に何コマのノートテイクを行えるかですが、ある大学では週に二回までと決めています。支援学生も自分の授業を受けなければならぬので、何回でも、というわけにはいきません。自分のことは放っておいてノートテイクばかりやっている学生もいたので、大学として前述の規制を設けたとのことでした。

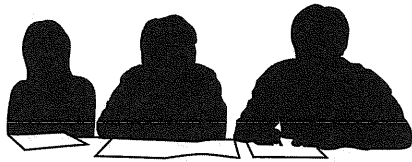
そうすると二六名三二回〓一三名の支援学生が必要となります。「なんだ。その程度ならなんとかなりそう」

実はここからの計算が大変なのです。一三名というのは、確実に毎週必要な人数です。つまり実働数では、一三名という実働学生を得るために必要な母集団の数はどのくらいでしょう。

「年度始めに支援学生として登録して貰いますが、年間を通して動くのは三分二程度です」

「一〇〇名くらいの支援学生が登録していますが、実働は二〇名ほどです」

実働率はよくて六割程度、二割という場合もあります。これから逆算すると、一三名の学生を得るためには、少なくとも二〇〓三〇名、できれば五〇名程度の学生が必要であり、そうでないと安定した支援ができないということになります。これは簡単な数字ではありません。



Mのマイクと補聴器、手話通訳の配置などもありますが、一番多く利用されているのは、要約筆記、いわゆる、ノートテイクです。これは、聴覚障害学生の隣で、授業中の先生の講義内容や受講生の質問、チャイムの音など、教室内に生じる様々な音声情報をノートに書いて、聴覚障害学生に示すことです。そして、これを行う支援スタッフ（通常は学内の学生が行うので支援学生と言います）をノートテイクと呼びます。

ノートテイクに関する現在の最大の課題は、ノートテイクの確保です。つまり人が足りないのです。そしてもう一つ、ノートテイク間のスキルの違いです。

ノートテイクの必要人数

さて、どのくらいのノートテイクが必要となるか、その人数を計算してみましょう。一コマの授業で、一人の聴覚障害学生に、ノートテイクは二人必要となります。一人で八〓九〇分を書き続けることはできないので、二人が交代でノートを取ります。

一年次生ですと、授業数は一週間に一〇〓一三コマくらいあるでしょうか。すべての授業に講義保障を行う（つまりノートテイクをつける）となると、一三コマ×二名〓二六名の支援学生が必要となります。

更にノートテイクを希望する聴覚障害学生の数が増える……。またノートテイクは、聴覚障害学生だけでなく、上肢障害の学生や、視覚障害の学生も利用する場合があります。

こうした理由から多くの大学で慢性的なノートテイク不足に陥っています。人手が足りません。やる気と技術を備えた支援学生は、かけがえない存在なのです。

このような状況を、少しでも改善しようと、学内でノートテイクを養成したり、OBや地域の団体に依頼したり、あるいはプロジェクトを使って一度に複数の障害学生が見られるようにしたりと、様々な手立てが講じられていますが、十分に障害学生の要望に応えられるところまでは至っていません。

いろいろな大学を拝見しての印象ですが、ノートテイクを希望する学生が三名を超えると、学部や学科単位の小さな組織による支援ではなく、全学的な支援体制が必要になるように思います。つまり全学委員会での対応、障害学生支援センターなどの設置、併せて、全学的な学生・教職員の協力です。